
彼が可愛い？あたりまえ。

天宮 夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼が可愛い？あたりまえ。

【Nコード】

N0798T

【作者名】

天宮 夜

【あらすじ】

24h戦争コンビと攻男主でドタバタ。

どっちかっていうと（いや、かなり？）静雄最前線で臨也の扱いが不憫。

ジャンルは恋愛と称したコメディーだと思っていただければいいかと。

連載というかなんとかなく続きモノ…？のような感じ。

そして稀にR15な内容が入る予定。

基本的に甘々です

最強リターン（前書き）

記念すべき初の二次創作小説。

それを言い訳にするわけではないですが、完成度が残念です。

しかも甘々なはずなのにいきなり男主が酷いです。しかしこれから嫌というほど甘くなるので中和もかねて↑

…すみません、うそです。

では行つてらしゃいませ！！

最強リターン

「いいいざああやああっ！！待ちやがれっ！今日こそブツ殺してやる！！」

太陽の照りつける夏の午後の池袋。

そこではもう日常と化した非日常な出来事が繰り広げられていた。

「やだよ。っていうかそんな危ないこと言いながら追ってくる人に待てって言われて待つ人は相当な変人だと思うよ？」

ファアのついたコートひるがえを翻して逃げる黒づくめの青年と、それを追うバーテン服の金髪青年。そしてどんどんその近くからいなくなる人々。

それだけでも十分に奇怪だが、さらに目を疑うようなことが起る。

「ゴチャゴチャうぜえんだよ！変人はお前だろおがっ！！」

そう叫んだバーテン服の青年は近くにあった自販機を持ち上げると、黒づくめの青年に向かって

投げた。

「うわっ！！」

突然のことに、追われていたほうは少しバランスを崩す。

（あ…マズい）

直撃は免れないかな…場違いなぐらいぼんやりと考えたとき、投げられた自販機と彼の間に一つの影が入り込む。

その刹那、ガンツ！という音と共に自販機が横に吹っ飛んだ。

「…え？」

啞然。まさにその言葉が相応しい様子の二人の視線の先に、片脚を高く上げた格好で立っている背の高い人物がいた。

そこで初めて自販機が蹴り飛ばされたのだと理解する。

「…！奏多さん…っ！」

短い沈黙の後、バーテン服の青年がその人物に駆け寄る。

すると奏多と呼ばれた青年はにっこりと…そりやもう見た人すべてをオトセそうなくらい綺麗に微笑むと、

「静雄、ちよつとそこに正座しようか？」

聞いた者を凍らせるぐらい冷たい声でそう言った。

そしてクルリと振り返り、今にも逃げ出さんとしていた黒づくめの青年の襟首を掴んで

「…臨也もだよ？まさかと思うけど、助けてあげたのに逃げようなんてしてないよね？」

と更に低い声音で、微笑んだまま言い放った。

ヒッ…と小さく聞こえた悲鳴は無視して、先に大人しく地面に正座していた静雄の横に並ばせる。

…かなりシユールな光景が出来上がった。

さつきまで喧嘩とは言えないレベルで争っていた二人が並んで正座をしており、その前に笑顔のまま恐怖しか感じられないオーラを放つ青年が立っている。

「周りに迷惑をかけるなってオレ、何回言っただけ？」

「…5687回です。」

答えに奏多はいつそう笑みを深くして、

「当たり前！！…だけど頭のいい臨也くんはオレがそういうことを言ってるんじゃないっていうのはわかってるよね。何回言ったら理解してくれるのかな？って嫌味を言っただけだっただけだ。」

臨也が何故回数を覚えていいるかなんてことに誰もツツコまない。何故ならこの空気の中でそんな勇気のある行動をとれる人物などここに存在しないから。

奏多は体を屈めてその顔を覗き込む。

あまりの威圧感に臨也は目を見開いて固まった。

「っ…すみませんでした！」

やつとのこととで謝罪の言葉を絞り出すと、判ってるならいいよ。と言つて奏多は臨也から離れた。

緊張の糸が切れたのか、その場にへたり込む臨也を視界の端にとらえた静雄の顔が恐怖で引きつる。

「静雄？…そんなに怯えないでよ。オレ、まだ何にもしてないよ？」

いや、その笑顔が怖いんです！！…なんて先ほどの臨也を見た静雄に言えるはずもなく。

ただ自分を見つめている奏多を涙目になりつつ見上げることしかできなかった。

すると奏多が急に

「ん、そろそろここからどいたほうがいいかな。」

先ほどから顔に張り付けていた笑顔を消してそう呟く。
周りの冷たい空気が一気に霧散した。

「静雄へのお説教は後にしよう。ほら、ついてきて。」

静雄の手を引いて立ち上がらせると奏多は振り返り、へたり込んだままの臨也に向かって

「臨也、まだまだ言いたいことはたくさんあるけど君へのお説教はもうオシマイにしたげるよ。…また静雄と争われても困るしねだから、これから二週間は池袋（いけぶくろ）に来ないように。仕事でもだよ。いいね？」

そう一方的に言うと、臨也が頷くのを確認して小さく震えている静雄と共に歩き出した。

奏多と静雄が姿を消し、いつの間にやら臨也もいなくなると、三人以外誰もいなかったその通りには徐々に人々が溢れだし、五分後には完全に何事もなかったように“日常”が流れだした。

でいる自販機以外は。

…道路ににめり込ん

最強リターン（後書き）

とてもn番煎じ感が否めませんが、いかがでしたでしょうか？
前書きにもあるようにこれからどんどん甘くなると言い張ります
よー！！

これからよろしくお願いいたします。

確信トラップ s i d e ・ K (前書き)

ちゅうい！！ 前回とはうって変わったような赤面&腐向け率です！！

なんだか書いてて訳がわからなくなってしまった…。

奏多さん(男主)についての説明は、次回ぐらいから書くつもりです。

あぁっ！「順序ってものがあるだろうが！！」なんて言わないでください！！

確信トラップ side・K

男主視点

視線が気になるな… まあ仕方ないか。

そんなことを思いつつオレはそつと後ろを見る。

そこにはシユン…とうなだれながらオレについて来ている池袋最強の姿。

さぞかし珍しい光景だろう。

…その金色の髪に伏せられた犬耳が見える気がして、気付いたら目線より少し低い位置にある頭を撫でていた。

「！？^{かなた}奏多さんっ？」

素っ頓狂な声でオレの名前を叫んで、静雄は下を向いていた顔をオレに向ける。

おお、真っ赤だ。

そんなことを思っていると、静雄の顔が一気に青ざめた。…どうしたんだろ？

「…どつどつど、どうしたんすか！？俺、またなんかしましたかっ！？」

どうやらオレは知らないうちに笑んでいたらしい。

いつもならオレの普通の笑みと、怒っている時の笑みを静雄が見間違えることはないのだが、先ほどのことがあったせいか保身的になっている。

「ははっ、大丈夫だよ。静雄は何もしていないし、オレは怒っていないよ。」

「…ほんとっすか？」

ああ可愛い。少し情けない顔で見上げてくる彼はもうなんというか…

「萌えよね!!」

「おお、それだ!…って、え、狩沢？」

「やほー、かなたん　久々だねえ。元気だった？」

「奏多さんお久しぶりっす。」

いつのまにやらオレの真後ろに狩沢と遊馬崎が立っていた。

「いやいや『かなたん』はやめてくれ」

「まあまあ、気にしないでくださいよっ」

「じゃ、せめて『』はやめてくれ…。」

どっかのネカマを思い出すから。

狩沢とはなぜか話が合うし、テンポも良くて楽しいと感じる。

が、この異常なほどのテンションはどうにかならないものだろうか。

「あれ？シズシズ超真っ赤!!なにになに?もしかして奏静な感じっ!?!あ、まさかの静奏?うわイケメンヘタレ攻め×美形腹黒青年とかナニそれ萌える!!」

「狩沢さん…リアルでBL発言は自重してほしいっす。ほら、奏多さん達も困って…え？」

一人でマシンガントークを始めた狩沢を遊馬崎は呆れたような声

で宥^{なだ}めていたが、オレと静雄を視界に入れて絶句した。

「なんだい？遊馬崎くん。」

わざとらしく彼に問うが、まあ驚くのも無理はないと思う。

オレは一瞬のうちに静雄の細い腰に腕を回して彼をホールドしていたのだ。

オレの腕の中にいる本人すら気づいてなかったようで体を硬直させ、口をパクパクと動かして何か言おうとしているが声になっていない。ははっ、されるがままだ。

「もうっ、奏多さんもノらないでくださいよ！！！」

「うえ、あゝかかか奏多、さん！！！！！！？」

「なあ、狩沢、どっちだと思う？」

遊馬崎のこの状況からすればもっともなツッコみのセリフと、静雄の慌てた声をあえて無視し、狩沢に問いかけてみた。

「んゝ私的にはどっちもオイシイと思うんだけど、やっぱりかなたんが攻めだよねえ。こゝんなに純なシズシズが攻めるなんて無理そうだしさ」

だから語尾の　はやめろって。

オレに抱きしめられたまま真っ赤になった顔を伏せている静雄を見て答えた彼女に

「ご名答。ま、これからどうなるかは静雄くんしただけだね。」

そういつてニヤリと笑ってみせ、静雄を腕の中から解放した。

「うはwリバ予告！？かなたんってばいちいち萌えるポイントおさえてくれるねえ！」

「二人とも、静雄さんが可哀想なんでそろそろ…」

遊馬崎のその言葉に、結構話し込んでいたなと気付き、会話をやめる。

「じゃ、オレらはそろそろ行くかな。…静雄。」

名前を呼んで、未だに羞恥やらなんやらで下を向いたままだった静雄をこちらに向かせると、不意打ちのようにその唇にキスを落とす。

「っ…んう！？」

狩沢のキヤーとかいう歓喜の悲鳴を聞き流して、再び固まった目の前の真っ赤な顔を眺めつつ、たっぷり10秒はその柔らかな感触を堪能した。が…

「うおっ！？」

唇を離れた直後に、浮遊感がオレを襲った。

触れるだけの軽いキスだったにもかかわらず、狩沢曰く『純』な彼はかなり動揺したようで、唇を離れた瞬間、投げられた。背負い投げ…とかじゃなく、ボールとか、モノをを投げる勢いで。

オレなら、投げられる前に避けることもできた。しかし素直に投げられ、空中で体勢を立て直し着地する。

もちろん、このセリフを言うために。

「静雄くん、オレを投げるなんていけないコだね？さあ、帰って

お仕置きだ。」

わざとニツコリと微笑むと、サーツと血の気が失せる音が聞こえた気がした。

横で興奮して何やら叫んでいる狩沢と、そんな彼女を静めようとしている遊馬崎に

「お二人さん、またな！」

と声をかけ、先ほどとは真逆に真っ青になった静雄の腕を引いてオレは帰路についたのだった。

確信トラップ s i d e ・ K (後書き)

なんだか前回に増してカオスでしたね…。精進します。

狩沢さん、遊馬崎さんの口調は曖昧…。ってかも僕仕様。加えて静雄さんが誰おま状態です(笑)

あ、狩沢さんの静雄〃シズシズ呼びは多分公式ではありませんので何も言わないでくださいませ…。

では、心の広い読者様はまた次回お会いしましょう!!

確信トラップ side・s (前書き)

前回のお話の静雄さん目線ver。

ちょこつとだけ奏多さんの生態(?)が明かされます。

そしていつも以上にggagg。

では、ごゆっくり

確信トラップ side・S

いつもと変わらない昼の池袋の喧騒。

しかし、普段より俺に…いや、俺の方に向けられる視線が多い。

原因は俺の一步前を歩いている青年、かなた奏多さんだ。

平均より高めな俺より更に5？ほど高い長身に、細身だがひ弱そうに見えない綺麗に筋肉のついた肢体。出会った頃から変わらない、色素の薄い瞳とダークブラウンの髪が印象的な美人だ。

すれ違う人々全てが振り返り彼に見惚れる。みと

意外と自分の事には鈍い彼は多分、気付いていないのだろう。視線の原因が自分だということに。

きっと俺がトムさん以外に大人しく連れられていることに対してだとも思っているはずだ。

…怒らせた後で機嫌が悪そうだから口には出さねえけどな。

奏多さんは高校時代の先輩で、歳は俺の一つ上。

彼は校内で（悪い意味で）有名だった俺の事を早くから知っていたようだが、俺が彼を知ったのは来神に入学してから半年以上経った頃だった。

放課後、いつものように繰り広げられる喧嘩騒ぎ。

俺が投げた机や椅子、ドアが臨也に向かって飛ぶ。

その日は珍しく奴を追い詰めることができ、トドメに拳をあの二ヤけたツラに叩き込もうとしたのだが…

「はい、今日はここまで。 - 静雄くん、行き過ぎた暴力はよくないよ?」

と、あまりにも場違いなような声音が聞こえたと同時に、全力で放った拳を拍子抜けするぐらいあっさり止められた。

…いつの間にか臨也と俺の間にいた奏多さんに抱きしめられることで。例えるなら父親が息子にするような優しい抱擁に、一瞬で力が抜けた。

あの不思議な感覚と、視界に入った甘い笑顔は今でも鮮明に思い出せる。

そんなことがあってから、俺（ついでに新羅と臨也）は奏多さんとよく行動を共にするようになったのだが、それから少し後にちょっとした事件が起こり、俺も臨也も奏多さんには敵わないことを本能的に悟った。

だが決して一方的に支配される形にはならず、彼が卒業するまではほぼ毎日顔を合わせていたと言っても過言ではないし、それからも週末にはよく集まる程度には親しくなった。

しかし、彼は俺たちが卒業してすぐに池袋から姿を消した。音沙汰無の状況に俺は柄にもなく狼狽え、

臨也が“奏多さんは留学している”という情報を掴んでくるまで口々に眠ることもできず何度かぶっ倒れた。

よって、今日出会った（?）のが数年ぶりの再会というわけだ。
なのになんなんだ。この状況は。聞きたいことも山ほどあるのに、いきなり怒られてしまつて俺はどこかに連行されている。

…奏多さんは今、どんな表情をしているだろう?

前を歩く奏多さんの靴を見つめつつ、そんなことを考えていると不意に頭を触られる感覚。

驚いて顔をあげると奏多さんが微笑んでいた。

「！？奏多さんかなたつ？」

反射的に素っ頓狂な声で彼の名前を呼ぶ。

数十分前を思い出し、鳥肌が立った。怖い…彼の笑みは綺麗で怖い！！

また機嫌を損ねるようなことをしただろうか？

「…どつどど、どうしたんすか！？俺、またなんかしましたかっ！？」

思わず悲鳴に近い声で問うと、彼は一瞬不思議そうな顔をした後に優しく笑って、

「ははっ、大丈夫だよ。静雄は何もしていないし、オレは怒ってないよ。」

そのセリフに心から安堵する。

と同時に頭を撫でられていたという事実に関が熱くなる。

…やべえ。今、絶対真っ赤だ。

一瞬にして何も考えられなくなってしまった。

「あれ？シズシズ超真っ赤！！なにになに？もしかして奏静な感じっ！？あ、まさかの静奏？うわイケメンヘタレ攻め×美形腹黒青年とかナニそれ萌える！！」

そこへいつのまにやら奏多さんと話していたらしい狩沢のぶっ飛んだ発言が耳に飛び込んだ。

意味わかんねえ…。なんと返答したらいいのか全く分からない。

奏多さんと遊馬崎が狩沢に何か言っているのを眺めていると急に視界が遮られた。

「え…？」

数秒して俺は自分の置かれている状態に気付く。

俺八、奏多さんに、抱きしめられて、イル。

「うえ、あ… かかかか奏多、さん！！！！！！？」

本日2度目の素っ頓狂な声を上げてしまった。なんだ！？いったいあの短い(?) 会話の中で何があったっ！？

「なあ、狩沢、ど…ちだと思う？」

奏多さんの不思議なセリフはもうこの際スルーだ！！

それから彼は狩沢となにやら不穏な会話をしていたが、俺は意識的に耳に入ってくる単語を遮断することに集中した。

「二人とも、静雄さんが可哀想なんでそろそろ…」

遊馬崎が二人に静止をかけてくれたことによって、やっと地獄のような状態から解放された。

…うん。今日ほど羞恥で死ぬと思った日はないな。

「じゃ、オレらはそろそろ行くかな。… 静雄。」

名前を呼ばれ、腕を引かれる。

恐怖の時が来るのが分かっている、他愛のない接触が嬉しくて思わず顔を上げる。

・それが自分の首を絞めるということも知らずに。

「っ…んう!？」

細められた綺麗な瞳が目の前に来ていて、自身の唇に柔らかな感触。

遠くで狩沢の悲鳴が聞こえた。何かあったのか？

どこかぼんやりとした思考でそう考える。

数秒なのか数分なのか…そのまま時間が経過した頃、ペロリと唇を舐められた。

そこでやっと俺は奏多さんにキスされていたことに気が付いた。

しかし、そこから先は頭の中が真っ白になり、ほとんど記憶に残っていない。

次に冷静になった時、あの恐怖心にか感じられない綺麗な微笑みを顔に張り付けた奏多さんが目の前に立っている。

「静雄くん、オレを投げるなんていけないコだね？さあ、帰ってお仕置きだ。」

やっぱり恐怖しか感じられない声で俺は死刑宣告を下された。

確信トラップ s i d e ・ s (後書き)

ああ、なんだか甘い…。

さてさて、臨也さんと静雄さんの扱いが違いすぎる件について。

天宮の中では 臨也さん↓肉体的

静雄さん↓精神的

…みたいな感じで奏多さんが攻めるイメージです。

今回は公開羞恥ぶれry ↑なんか違う。

- - なんかすみませんでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0798t/>

彼が可愛い？あたりまえ。

2011年7月6日18時23分発行